

2025年4月20日 イースター礼拝メッセージ

聖書:ヨハネの福音書20章24～31節

説教:見ないで信じる人たちは幸いです

はじめに

きょうは主の復活をお祝いするイースターですが、そのイースターにあわせて、この教会では先に天に召された方々を思い起こしながら主のみわざを覚える召天者記念礼拝とさせていただきます。キリスト教は死というものをいつも考えている宗教であるといわれることがあります。今朝はヨハネの福音書を開き、十二人いたイエスの弟子の一人であるトマスがよみがえられたイエスに出会ったとき何が起きたのか、そのことを通して死といのちについて聖書から考えてまいります。

1 イエスの死と復活

イエスが十字架で死なれたのが金曜日の夕方、アリマタヤのヨセフという人が来てイエスの亡骸を十字架から降ろし、墓に納めることにします。ところが日没が迫っていたので、やらなければならないいろいろな処理を施す時間的な余裕がありません。というのは、金曜日の日没から日曜日の日の出までの安息日のあいだ、働くことが禁じられていたからです。それで簡単な処置だけして墓の蓋をしめます。そして日曜日の朝になり、残っていた作業をしようとしてまだ暗いうちに数人の女たちが墓の前にやって来ると、なんと墓は空っぽです。マリアが、これは誰かがイエスの亡骸を盗んで行ったのだと思って泣いていると、そこへよみがえられたイエスが立ってくださりたいへん驚く。この後、弟子たちの前にもイエスが現れて大騒ぎになる。ところがそのときまたま何かの用事があったので、トマスだけはその場にいなかった。出先から帰ってくると、弟子たちが「私たちは主を見た」と興奮しながら騒いでいる。これを聞いたトマスはどうしたか。それが今日の箇所背景です。

2 トマス

1) 漁師であった

トマスとは何ものなのか。21章を開くとトマスが他の弟子たちとガリラヤ湖に戻ってそこで漁をしていたことが書かれているので、トマスはもともと漁師だったとわかる。ペテロもそうだったようにトマスもあるときイエスに出会い、漁師をやめてイエスの弟子となり、およそ三年半にわたってイエス学んできた人です。

さて、トマスが漁師だったと聞いて、みなさんはどんな人物像を思い描くでしょうか。私は結婚してすぐに地方の漁師町に住んで妻の実家のお店を手伝っていました。そこには漁師の方も来ました。話をすると言葉が乱暴で叱られているのかと思うくらいでした。あれは怒っているのではないとわかるのにだいた時間がかかりました。そのいっぽうで農家と違うなと思うこともありました。豊漁となれば家が一軒建つくらいお金が入るのだそうです。ものごとを慎重に考えるというよりも、一発当ててやろうというような荒っぽい人たちもいた。

2) 科学的態度

ではトマスはどうだったのか。みなさんも経験あるかもしれません。みなが興奮して「すごい、すごい」と言えば言うほど、聞いているこちらのほうがだんだん距離を取りたくなる。トマスがそうでした。まして十字架で死んで墓に葬られたはずのイエスがよみがえられたというのです。そんな話し誰が信じるか。頭がおかしくなったのか、何か変なものでも食べたに違いない。無理ありませんが、そんなふうに冷たい視線で見えてしまう。トマスのユニークなところは次の箇所です。25節。「そこで、ほかの弟子たちは彼に『私たちは主を見た』と言った。しかし、トマスは彼らに『私は、その手に釘の跡を見て、釘の跡に指を入れ、その脇腹に手を入れてみなければ、決して信じません』と言った。」

よく言われることですが、新約聖書が書かれたのはいまから二千年前の古い時代なので、当時の人たちはありもしない作り話や神話のようなものを簡単に信じた。科学の時代に、聖書をまじめに読むなど意味がない。そんなふうに思っている方もいます。もちろん二千年前はロケットや飛行機はありません。だからと言って、昔の人たちは愚かだったと決めつけるのはまちがいです。もし本当に今の私たちはもっと賢いというのなら、どうしてまだ人が人を殺し合っているのか。戦争がどうして止まないのか。人間は愚かなままで本質は何も変わっていない証拠です。

さてトマスに話を戻します。トマスはこう言っています。「私は、その手に釘の跡を見て、釘の跡に指を入れ、その脇腹に手を入れてみなければ、決して

て信じません。」トマスは漁師でしたが、粗暴な人ではなかった。この態度、ひとことで言うなら科学者です。自分の手で実験して本当にそうかどうか確かめるまでは判断を下さない。二千年前にもちゃんと科学者がいたのです。

3) 私の主、私の神よ

さて、それから八日後、今の数え方で言えば一週間後、イエスが再び現れてくださり、トマスにこう語りかけます。27節。「あなたの指をここに当てて、わたしの手を見なさい。手を伸ばして、わたしの脇腹に入れなさい。信じない者ではなく、信じる者になりなさい。」

トマスはどうしたか。今見えているのは幻かもしれない。自分の頭がおかしくなった可能性もある。冷静になって、脇腹に手を入れて確認し、なんなら物差しを持って来て傷の大きさや深さを測って記録する。一週間前、トマスはそうすると言っていた。でも今、トマスはイエスのからだに触れようとしめない。ただこう言うのです。28節。「私の主、私の神よ。」いったいどうしたのでしょうか。あまりにもリアルなイエスが現れたので、腰を抜かして身体が動かなくなり、口も満身にきけなくなってしまったのか。

3 イエスと私

1) イエスのからだに刻まれた傷

他の福音書を見ると、よみがえられたイエスが初めて弟子たちの前に現れたとき、幽霊が出たと思っておびえて震え上がったと書いてあります。ですからトマスもおびえたのかと思うかもしれませんが、そうではない。もしただ震えていたというのなら、「私の主、私の神よ」とは言うことはできません。今日の前に立っておられる方は幽霊ではない。まさに、神である方が現れてくださっている。それは疑いようがない。心からの告白した。多くの方は、この説明を聞いて「そんなものか」と納得するでしょう。私はトマス以上に疑り深いので納得できない。

どういうことか。もう一度思い起こしてください。トマスはなんて言っていたか。「私は、その手に釘の跡を見て、釘の跡に指を入れ、その脇腹に手を入れてみなければ、決して信じません。」あれほど、慎重だったトマスが、なぜイエスのからだに触れようとしめないで、即座に「私の主、私の神よ」と告白したのか。

科学者トマスは、イエスのからだに残されている傷を慎重に調査することによって、事実なのかそう

でないのか判断できると考えました。科学者として当然の態度です。イエスのからだに残されている傷が自分とどんな関係があるか、そんなことは考える必要はありません。ニュートンは、リンゴの実が木の枝から落ちるのを見て万有引力の法則を発見したと言われますが、あの枝にぶら下がっているリンゴの実と自分がどんな関係があるかについてはニュートンは何も言わない。科学というものはそういうものなのです。しかし聖書はそうではない。読む者に科学者の態度で終わろうとすることを許しません。

2) 私の罪のために

誰がイエスの手に釘を打ち込み、誰がイエスの脇腹に槍を刺したのか。誰がイエスを十字架に追いやって殺したのか。もちろんそれは、ローマ兵に決まっている。もう少し掘ればポンテオピラトが死刑の判決を下したから。律法学者たちが民衆を扇動したから。いろいろ言えるけれど、では自分はどうなのでしょう。関係ないと言えるのか。一週間前、トマスは自分には関係ないと思っていた。だからあんなことが平気で言えた。しかしいま実際によみがえられたイエスを見たとき、はっきりと知らされました。イエスのからだに刻まれたこの傷は、私の罪のためであった。そのことにまったく気がつかずに自分はなんと傲慢なことをいっていたのか。トマスはそのことを知らされて、このように言うしかなかった。「私の主、私の神よ。」トマスの罪の告白です。

3) 見ないで信じる人たちは幸いです

誰もが言います。「もし神さまを目で見て、指で触れることができたなら信じます。いるかどうかかわからない神を信じろと言われてもできない。」確かにそのとおりです。しかしイエスはトマスに言われました。29節。「あなたはわたしを見たから信じたのですか。見ないで信じる人たちは幸いです。」

ここに見るとか見ないとか繰り返されています。よみがえられたイエスを見るか見ないかということですが、もう一つトマスのことから教えられる。イエスのからだのどこを見るのかです。トマスの目はどこを見ようとしていたか。彼は自分の口であらかじめ言っていた。イエスの手に刻まれた釘の跡、脇腹に残された傷口。それを見るのだと言っていた。ところが、実際にその傷を見たとき、これは自分とは関係ないとは言えない。まさにこの傷は、私の罪ためであると迫ってきた。ということはイエスはこのような言っておられたのではない

か。あなたがたは、実際にイエスのからだに刻まれた傷を見ることはないでしょう。その代わり、自分の罪に目を向けなさい。そうしたら何が見えてくるか。あなたのそこにある罪を赦すために、十字架でご自身を献げ、死に、そしてよみがえられた方を思い起こすことになる。でも素朴な疑問がある。罪など見たくないという人もいます。それなのにどうしてわざわざそんなことをするのか。31節後半。「信じて、イエスの名によっていのちを得るため。」イエスのからだに刻まれた傷をとおして自分の罪を知らされ、「私は罪人です」と告白するとき、死では終わらない永遠のいのちをいただくことになる。信仰の大先輩たちはこのことを信じて、最期までイエス・キリストを証して天に召されてまいりました。私たちもこの確信をいただきながら歩んでまいります。